

第14回「日本語大賞」

テーマ 私が^{だいじ}大事にしている言葉

中学生の部 優秀賞 受賞作品

「よく生きる」

静岡県

静岡大学教育学部附属静岡中学校

三年 金田 匠

特定非営利活動法人 日本語検定委員会

「いちばん大切なことはよく生きることである」

これは、古代ギリシャの哲学者、ソクラテスの言葉だ。ソクラテスは、その生涯をかけて人間の生き方について考えてきた。これは、生きる上での心の持ち方について、彼なりの一つの結論なのだと思う。

しかし、僕はこの言葉に出会ったとき、なんと漠然としたことを言うのかと思った。助け合いや相互理解が大切だと言うのではない。ただ「よく生きる」ことが大切だと言うのだ。

しかも、日本語においては、単に「よい」といっても、いくつかの意味が当てられる。他よりも質が高いという意味の「良い」なのか。それとも、道徳的に考えて好ましいという意味の「善い」なのか。

「良い」も「善い」も、自分を取り巻く第三者から見て、自分の姿がどう映るかということに重点が置かれているように思う。つまり、客観的な視点から見た自分なのである。

もちろん、周りから尊敬される人、慕われる人になるのは素晴らしいことだ。十分な実力と、豊かな人間性がなければ、そのような人にはなることができない。

しかし、第一に大切にすべきは、自分の心に素直になることではないか。周りの評価を気にして、自分の本当にしたいことができなかつたり、言いたいことが言えなかつたりするのは大変もどかしい。

僕自身、周りからどう見られるかを気にかけるあまり、尻込みしてしまうことが多々ある。例えば、授業中にある二人が繰り返し発言し、熱弁を振るっていたとする。僕はその議題に対し意見を持っていても、自ら発言するのをためらってしまうことがある。二人の発言の邪魔になってしまうのではないか。間違った発言をしてしまい、白い目で見られるのではないか。あれこれ考えだけが先走り、「空気を読んでしまう」のだ。

このような経験は、誰にでも一度はあるのではないか。僕はこのようなとき、ソクラテスの言葉を思い出す。尻込みしてしまうのは、常に「良い人」や「善い人」に見られたいからではないか。それにより、自分の行動が制限されてしまうのは不満だ。

そこで僕は考えた。ソクラテスの言う「よく生きる」とは、「懸命に生きる」ことではないか、と。自分の心に素直になり、それを行動に移すため、懸命にためらいの殻を破る。行動しているときも、懸命に努力し、自分の目標の達成を目指す。

決して、自分勝手や自己中心的な人物になるのではない。自分の望みと向き合い、それを叶えるためにする懸命な努力は美しいと思う。実際僕は、自分の考えをしっかりと表に示すことのできる人や、自分の信念に基づいて行動している人を格好いと思うし、尊敬している。評価も後からついてくるのではないか。

少しスケールの大きい話になったが、これは普段の授業でも変わらないと思う。先程の発言の場面を例にとれば、何か考えがあるのなら、懸命に発言の意思を伝える。つまり、勇気を出して手を上げてみる。そして、懸命に自分の考えを伝える。もしかすると、その意見は核心をつく「良い」意見かもしれない。論点のずれを補正する「善い」意見かもしれない。それは言ってみなければ分からないが、何も言わなければ可能性はゼロだ。

「懸命に生きる」ことが「よく生きる」ことだと考えたなら、少し楽になったような気がする。周りからの評価を中心に生きるより、自分の心を中心に生きる。なぜなら、今生きているのは自分自身の人生なのだから。先回りして評価に振り回され、可能性をつぶしてしまつては勿体ない。

近頃、ウクライナ情勢の影響か、「平和」というワードをよく耳にするようになった。もし、世界中の全ての人が「懸命に」生きたなら、平和は訪れるだろうか。評価が下がることを恐れ、本心を包み隠すことを止めれば、すれ違いによる争いは防げるのではないか。自分の信念を表に示し、戦争に反対する声を上げる人も増えるはずだ。

このように考えると、ソクラテスは、あの漠然とした中に、現代社会にも通じる痛烈なメッセージを残してくれたように思う。ただただ素直に、懸命に生きる。自分が生きることだけで精一杯でも構わないと思う。誰もが、自分が納得できる人生を生き、幸せを感じられたとき、平和は実現するだろう。

もう一度問いかけてみる。僕は何が好きか。僕は何がしたいのか。僕たちがすべきは、自分の心と対話しながら、懸命に生きること。それが、いちばん大切なこと。